

ちようど飽きていたところ

彼ら三人を乗せた救命ボートが衛星カリストの周回軌道を脱したのは三週間前のことだ。それから今に至るまで通信は途絶えたままであり、彼らは依然として漂流を続けている。または、彼の解釈によれば、茶番劇を続けている。

劇はとて静かに進行している。このボートそのものを除いて、周囲十八億メートル以内に音源は皆無だ。小さな窓からわずかに見える空間に変化はない。星々は配置を変えることもなく、太陽はボートの進行方向のために姿が見えない。

彼らは太陽から隔たった地球から隔たった木星

から隔たった衛星から、さらに遙かに隔たつていく。

彼は地球にある雑誌社の記者で、木星圏の観光について取材をするためという表向きの理由でカリストを訪れたのだった。残りの二人は取材相手の広報と定期連絡船の整備技師だ。

彼の目の前には十七インチの小さなホログラムモニタがある。そこに映し出された三次元チェスの立体フィールドが点滅する。c3yの地点で黒の僧兵が白の王を捕獲する。市松模様のフィールドが崩れ、黒の勝利という文字が残る。短いファインファーレが流れる。次いで通算成績が表示される。漂流しはじめて以来の成績だ。零勝百五十五敗、勝率零割。ネットワークに接続できないこと

には、コンピューターお得意のスキャンジナビア・

デイフェンスに対する効果的な対応方法を検索することもできない。

終わりましたか。

広報の男が言う。まったくもって、ついていませんな。

この男は地球からの出向社員で、木星暮らしは五年になるのだそうだ。とても太っていて、酒樽のような体つきをしている。低重力をいいことに、手足をほとんど動かさずに彼の近くに寄ってくる。

彼は泳ぐようにしてそこを離れる。広報の男は彼に代わってモニタの前に着き、広報の男は何や

ら操作を始める。無意味な演出だ。

広報の男はモニタに顔を向けている。モニタの中ではグラフが波打ち、お決まりのプロトコルエラーが示される。そのあとにも男はいくつかのグラフを開いては閉じ、それから現在の状況を説明する。それによるとこのボートはだいたい二キロノットほどの速度で、惑星公転面に対してほぼ垂直に飛行しているらしい。広報の男の口ぶりはまるでツアーガイドのそれのようだ。同じ調子で、通信はいまだ回復しないと云う。

この報告も、小さな丸い窓からの眺めも、三週間前から代わり映えしない。窓から見える空間には奥行きも広がりも感じられない。まるですぐそばに立てかけてある真つ黒な板だ。ところどころ

に針の先で突いたような穴が開いていて、わずかばかりの光が洩れている。

まったくついていませんね、富くじで大当たりをするような確率です。広報の男は言う。いや、もっと低いかもしれません。

千度もくり返された広報の男の話を聞き流そうとしながら、しかし彼は考える。ついていないと言えば、そもそもこんな木屋くんだりまで出張させられたことからしてついていないのだ。木屋圏の観光についての取材とは表向きで、本当のところは産業廃棄物処理場に関する談合と不正経理の調査が目的だった。

最もついていないのは、それについて触れられたくない人々に勘づかれていたことだろう。そも

撮さない方が無難だし、何より率直に言つてそこまでの厚意に応えられるほどの反響は見込めない。理由はそんなところだった。

そうして彼は定期メンテナンス待ちの船を取材することになったのだった。五百人乗りの連絡船はほぼ無人だった。

彼がカメラのファインダーをのぞきながら連絡船の救命ボートに乗り移り、所在不明の広報の男がそれに従った五分後のことだ。ひよろ長い体型の技師がぎくしゃくした動作で同じボートに入ってきて、点検を始めた二分後のことだ。その技師が点検をするふりをして端末で富くじの当選番号を調べ、目を丸くした、その瞬間だ。

前触れはない。死の予感が全身を覆う。平衡感

そも概して隠し事のある人々とは敏感なものなのだ。そこへ特に対策もなく送り込まれ、彼は富くじが大当たりをするような確率でしか起こらない事態に出くわしたというわけだ。

事故が起こったのは衛星カリストの周回軌道上に浮かぶ港の一画で、彼は衛星間定期連絡船の取材をしていて、ちょうど救命ボート内部の写真を撮影しているときだった。

彼が取材を申し入れると、連絡船の運営会社は酒樽のような広報の男をよこしてクルージングを勧めた。しかし雑誌に載せる写真はせいぜい三、四点であり、また、彼には次の衛星まで二十九日間の船旅がわずらわしくも思われたのだった。そこで彼はにこやかにそれを遠慮した。他の乗客は

覚が押し流される。彼は床に手と膝をつく。激しい音の中、握ったものは床に固定された椅子の脚だ。激しい揺れの中、跳ねるカメラに手を伸ばす。救命ボートの扉がギロチンのように下ろされる瞬間を見た気がする。

そして、押し寄せた衝撃と轟音は威勢よく救命ボートを暗い海に押し出す。

事故の三時間後に広報の男が説明したところによれば、ちょうど救命ボートと連絡船をつなぐ通路にかなり大きな漂流物が衝突したらしい。おおかた捨てられて漂っていたボルトだかナットだかタイルだかが突っ込んできて、とうとう人間への復讐を完遂したというわけだ。

まるで巡航ミサイルが炸裂したようだったと彼

は思い返す。しかし彼にとって漂流物の衝突もミサイル攻撃も未経験の事象であるため、衝撃だけでそれらを判別することはできない。ただ、今にしてみれば、さすがにミサイルは大げさすぎるだろう。彼は考える。だが、だからといって漂流物の仕業と決まったわけでもない。つまり手頃な爆弾ではなかったということにはならないというわけだ。

そもそもこの辺りのエリアでは漂流物そのものが非常に少ないのですが、と広報の男は言う。この手の事故では最大の事例かもしれません。

漂流物が少ないとは、地球の不景気ゆえ投資が途絶えて開発がままならない状況に対する皮肉だろうか。彼は考える。それならば連絡船側の防御

システムはまったく稼働させなかったせに救命ボート側の緊急離脱システムは過剰に稼働させたのは、どういう意図だ？

一瞬の轟音を合図に始まった茶番劇は、今のところすこぶる静穏に進行している。港だけでなく、ありとあらゆる通信は終始絶えたままだ。彼の耳に聞こえるのは技師があちらこちら開けたり閉めたりする物音と、広報の男の独り言だけだ。

広報の男は事あるごとについていないと言う。富くじの大当たり並の確率でついていないと言う。つまり取材を諦めろというわけだ。

取材を諦めることにすれば、ネットワークに接続できるだろうか。スカンジナビア・デیفエンスを打ち破る方法を検索することができるだろう

か。そもそもこの取材をするに当たって正義感だの使命感だのがあったわけではない。単なる仕事だ。不幸な事故のために継続不能になることであるだろう。何せついていないのだ。

広報の男がもう少し明示的に求めるなら、表面上は渋々ながらに彼は従うだろう。すなわち取材は諦め、すでに得ているデータは引き渡し、バックアップも抹消するだろう。だが聞かれもしないことをしゃべる気にもならない。彼はそう考えている。聞かれれば答えるが、それさえこちらから提示するなんてばかげている。といって要求を引き出す試みも面倒である。駆け引きはまっぴらだ。

彼は広報の男を眺め、自身の計算違いに気づかないものかと思う。すなわち彼が生還に大した

価値を認めていないということを察してくれば、あとはどのようなにも構わないのだと。

キャビンの扉が開いて、ひよろ長い男が漂うように入ってくる。広報の男は立体画像を展開するモニターから目を離さず、どうだったかと声をかける。技師の男は首を振る。エンジン系統の調整に当たっていたが今回もまた無為だった、という演出だ。

ひよろ長い男は向こう側の窓に流れ、窓際の椅子に体を押しつける。工具箱から紙切れを一枚取り出し、窓に透かすように眺める。何を考えているのか分からない。この三週間というもの、この男はずっとこの調子だ。

技師の男は木星生まれで、現地採用されたらし

い。正確には衛星ガニメデで生まれ育つたということだが、それ以上のことは分からない。

三週間、救助はいまだなし。不意に広報の男は言う。ひよつとすると、事故死として処理が済んでいるのかもしれないね。わざとらしい物言いだ。ため息をつき、間を取る。いちいちわざとらしい。ところで、と広報の男は言う。

離婚調停をしてみましたね。

声を潜めて男は言う。だが広くはない船室の中でそれが聞こえない場所もないだろう。向こう側の窓際にいる技師に反応は見られない。だれの話なのだろう。

娘がいるんです、初等学校に通ってしまってますね。

この男の話だ。そんなことより、と彼は考える。カメラのレンズを外してみる。事故の時、壁に当たって床に落ち、そのせいでズーム機構に不調をきたしたのだ。まったくついていない。カメラは社の支給品ではなく、私物だったのだ。

そんなことより、とは広報の男の方でも同じことだろう。語り続ける。

初めのうちは親権を譲りたくなかったのだそう。あんな身持ちの悪い女のところに娘を置いておきたくはなかつたのだと言う。だが、と言って男は間を置く。何度も呼吸をする。

男は再び語り始める。いつ地球に帰れるかわからず、娘をこちらに連れてくるのも不憫だと考え

たのだと。それから技師に気を遣ったのかどうか分からないが、どこからどこに移るにせよ環境を変えるのは大変なことだろうからと付け加える。

ふむ、と彼は返事をするが、それ以上は何も言わない。

そんなことかと彼は思う。何でもないことだ。経験上、終わってしまったら何ということもないことだ。相談に乗ってやれないこともないが、と彼は思うが、声にはしない。そんなことをする義理もない。

男は何より交渉に疲れ果てたのだと言う。養育費、生活費、民事裁判、慰謝料。そもそも不義があつたのはあの女の方ではないのか、なのになぜ。今は第三者が何を言ってもむだだろうと彼は思

う。声にはしない。結局のところ今ここで意味を持つのは、この男が彼と似たような事情のために、彼と同様、帰還についてさほど執着がないということだけだ。

ちようど飽きていたところなんですよ。人生つてやつに。

彼もまたうんざりしている。広報の男の被害意識を透かす物言いに。それは彼自身のもの見え方についても同じことであり、それゆえ彼はうんざりしている。

技師は工具箱から紙切れを一枚取り出し、眺めている。

救命ボートは、さらに三日間漂流し続ける。

この三週間と三日の間、欠かすことなく十二時間おきにそうしてきたように、彼と広報の男はモニタの前で三次元チェスをしている。今回は彼が白で、広報の男が黒。これまで三勝三敗のいい勝負だ。

十二時間おきにそうしてきたように、技師がエンジンの調整から戻ってくる。広報の男は技師にだめかと声をかける。

技師は工具箱から紙切れを一枚取り出し、彼らに示す。富くじだ。引き替え期限はあと二か月なのだと言う。

広報の男はエンジンのことを問う。

技師は少し興奮気味に、成功だと答える。やつ

とのことで逆噴射に成功したのだと。技師は木星なまりの強い言葉でまくし立てる。正確なところはこれから計算してみるが、この出力ならばおそらく四週間ほどで帰還できるだろう。富くじが続けて二度も大当たりするような確率だ。喜ばしいではないか。

さあ、そこを空けてくれ。

広報の男は投了のボタンを押し、漂うようにモニタの前の席を離れる。彼もまた席を離れる。代わりに技師がモニタの前につく。